

『正義』を考える 生きづらさと向き合う社会学

大澤真幸著／NHK 出版新書

サンデルのハーバード白熱教室というのが昨年ぐらいに流行りました。それにあわせて日本内外のいくつかの有力大学でも白熱教室が開かれたように思います。あるいはハーバードより前からそのようなことをやっていたという大学もあるかも知れません。この流行が誰かによって扇動されたものかも知れないという穿った見方もありますが、ひとまずこのような議論をやりたいという気持ちが一般市民に少しはあった、ということなのでしょう。大学の講義で学生さんが何も質問しない昨今の状況と対比してやや理解できないところもあるのですが…。本書「正義」を考えるですが、社会のあり方を決定する正義の法則・理論をサンデルの論点に近い路線に沿って検討していきます。このような議論は社会のあり様と人間のあり様を細々と検討するのでその手法は哲学的とならざるを得ません。哲学という鋭利な電気メスで社会と人間の関係を解剖していくという進め方になっています。

本書の内容ですが、現代を生きる我々の難点（我々が進む道の難所という意味）は、まずは「物語」の欠如と位置づけます。私は「物語」とは以下のような意味だと解釈しました。私が子供の頃（1970年代）、世界の東西冷戦の只中で日本海をはさんですぐ北側には世界最大の社会主義国ソビエト連邦がありました。やや大げさですが“日本がソビエトのような社会主義に陥らないように、しっかり勉強し、体力をつけ、国力を向上させ、国際競争力をつけ、日本の国際的な地位を向上させ、ふるさとを愛し、隣人に寛容で、強きをくじき弱きを助け、妻を愛し、30歳過ぎぐらいに父親となり、子供をやさしくさとし、時々酔っ払って同僚に迷惑をかけるけれど、大過なく日常業務をこなし、人並み程度の出世と稼ぎがあり、少しの部下は育て、……少しの年金を頂戴しながら、やがて惜しまれながら亡くなる”というようなことをぼんやりと意識していたように思います。“そんなことは考えなかった”という人もいるかも知れません。もちろん人はそれぞれ固有の事情の中で生きてるので、その「物語」も固有のものではありますが、さりとて石川五右衛門のような大泥棒とかヒトラーのような独裁者になることを思い描いて日々研鑽に励む人はいないでしょう。広く社会に受け入れられるような何かを思い描いたのではないのでしょうか。ドリカムに「未来予想図」という歌がありますが、そ

んな感じですよ。

しかし、現代における難点である「物語」の欠如とは今の若い人達がこのような「物語」を昔ほど描けなくなったということです。自分が進んでいく放物線の軌道をはっきりと思いつくことができない。「物語」という言葉は、社会哲学の研究者が使う言葉のようで、森岡正博とか東浩紀の著作にもしばしば見られます。地球環境問題とか大災害に対する防災対策というようなことは、東西冷戦という「大きな物語」が終結した後、「物語」が見えなくなった現代においてかろうじて見出された、世界を前進させる「物語」と位置づけられます。

本書ではその後、このような難点をどのように切り抜けていくか考えていくわけですが、古典的な正義の理論（功利主義、リベタリアニズム（自由至上主義）、リベラリズム（自由主義）、コミュニタリアニズム（共同体主義）、コミュニタリアニズムの助っ人アリストテレス）を行きつ戻りつ検討し、結局、全部に「ダメだし」となります。さらに当然の成り行きだとは思いますが、資本主義・民主主義・国家・宗教も検討の対象となり、どれも芳しい結果とはなりません。民主主義（これに疑問を呈する人は殆どいない）と16世紀ごろのヨーロッパの絶対王政との親和性までも見出してしまうぐらいです。

サンデルも言っているようですが、コミュニタリアニズム（共同体主義）が当面の解決策の案となっているようです。ここ数年、市場経済というエンジンの飛行機に乗っていけば一安心だとする新自由主義が揺らぎだしています。大災害や世界経済の不穏も手伝って、我々はすぐに言いますね。「（防災のため）地域の共同体の力を発揮しよう」とか「共同体の絆が重要」だとかです。しかし、著者は現代の難点を共同体（コミュニティ）によって克服することは時代遅れだと断じています。先にも見たように共同体を支える「物語」が既に脆弱になっているからです。著者は、むしろこの共同体に含まれない人たち、共同体からはみ出さざるを得ず、そのために傷を負った人たちがそが普遍的な絆・連帯の担い手となると説きます。共同体というのは、先に考察したように機能しなくなった「物語」が背景にあることによって成立しているグループと言えます。共同体の一つの小さな例である町内会は防犯・防災・青少年の健全な育成・安心して子育てをする

場（すなわち物語）のためにあります。その共同体から村八分になった人たちは、言わば“所払い”、すなわち宇宙空間に放り出されたような意味での普遍性があるのではないか。キリスト教・イスラム教で破門を受けた者、江戸払い（追放を命ぜられたもの）、魔女として排除された者、職場をクビになった者、学校でいじめにあっている者…、著者はこのような立場にある者を“共同体の中で回収できないもの（副題の生きづらさに対応）を持っている者”と大きく位置づけます。そしてこのような生きづらさを抱えた人たちが、逆に現代の難点に悩む我々現代人のブレイクスルーになりうるのではないかと結論します。

以上がこの本の大まかな内容です。このブックガイドは本書の紹介をすれば足りるのでこの本を読んで私独自の考えを披瀝することは控えます（それができるほど考えが熟していないのです）。2011. 3.11の東日本大震災以降、“我々は一致団結して〇〇でなければならぬ”という言説が日本を席卷する中であって、この本によって“そうでなくてもよいかも知れない”ということを考える余地がある、ということがわかり、私はすっきりしました。東日本大震災が発生する少し前に出版された本なのに、です。東日本大震災の後にこの大災害を受けての著者の論考を発展させた著作として『社会は絶えず夢を見ている』（朝日出版社）があり、これもあわせてご一読されることをお勧めしたいと思います。こちらも相当面白いです。

執筆者紹介

細山田徳三

環境・建設系教授。専門領域は、水工学、流体力学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『「正義」を考える：生きづらさと向き合う社会学』大澤真幸著 NHK出版
(NHK出版新書) 2011年 861円

『社会は絶えず夢を見ている』大澤真幸著 朝日出版社 2011年 1,890円

[ブックガイド目次へ](#)